博士学位論文審査要旨

氏　　名	潘　　城			
学 位 の 種 類	博士（歴史民俗資料学）			
学 位 記 番 号	博甲第 301 号			
学位授与の日付	2023 年 3 月 31 日			
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当			
学位論文の題目	浙江省における茶文化の伝承と変遷 −五つの地域の調査事例を中心に−			
論 文 審 査 委 員	主査	神奈川大学	教授	小　熊　　誠
	副査	神奈川大学	教授	山　本　志　乃
	副査	神奈川大学	教授	後田多　　敦
	副査	神奈川大学	名誉教授	佐　野　賢　治
	副査	静岡市歴史博物館	館長	中　村　羊一郎

【論文内容の要旨】

潘城（Pan Cheng）氏の本博士学位論文は、中国浙江省の湖州市、磐安市、杭州市、嘉興市、景寧シェ族自治県の 5 地域を調査地域として、浙江省における茶文化についてその歴史を整理した上で民俗学的な伝承と変遷について論じたものである。

本論文の構成は、以下のとおりである。

序章　課題と研究方法
　第１節　研究背景と研究目的
　第２節　先行研究と問題の所在
　第３節　研究対象と研究方法
　第４節　本論文の構成
第１章　陸羽と浙江との関連－杼山、顧渚山の事例から－
　はじめに
　第１節　調査対象と調査地選定
　第２節　陸羽と杼山
　第３節　陸羽と顧渚山
　小結
第２章　磐安の茶神信仰－玉山古茶場廟の事例から－
　はじめに
　第１節　調査対象と調査地選定
　第２節　玉山古茶場の紹介
　第３節　玉山古茶場廟で行われる祭事
　第４節　磐安の茶神信仰の変遷
　小結

第３章　茶文化伝承に及ぼす政治的影響－杭州西湖龍井茶の伝承事例から－
はじめに
第１節　杭州地域における龍井茶の歴史
第２節　龍井茶の茶具と龍井茶製作法の伝承
第３節　龍井茶の伝承から見る茶文化と権力との関わり
第４節　龍井茶の市場価値と龍井茶伝承にあった変化
小結
第４章　嘉興章氏古茶園をめぐる茶文化伝承の性格－
はじめに
第１節　章氏古茶園の伝承と現状
第２節　章氏古茶園の生産について
第３節　章氏古茶園をめぐる茶文化祭の役割
小結
第５章　シェ族における茶文化伝承の性格と変容－景寧シェ族自治県の「金賞惠明茶」を中心に－
はじめに
第１節　景寧シェ族自治県の概況
第２節　景寧シェ族の茶俗
第３節　金賞惠明茶のブランド化と変化
第４節　景寧シェ族茶文化の性格と変容
小結
終章　結論と今後の課題
第１節　浙江省における茶文化伝承の性格
第２節　浙江省における茶のブランド化と茶文化の観光資源化
第３節　浙江省の茶文化伝承にある政治「権力」の影響
第４節　浙江省の茶文化伝承にあった変化と変遷
第５節　今後の課題
参考文献

本論文の序章では、中国浙江省における茶文化の歴史が深いこと、そして現在浙江省には茶に関する研究所が多いことを背景に、筆者の故郷である浙江省において郷土における茶生産と茶文化を研究することによって郷土研究を通して中国における茶文化を民俗学的に研究することを表明した。さらに、研究目的として以下の 5 点をまとめている。①浙江省における茶文化について唐代以降現代まで歴史的に整理し、その上で浙江省各地の茶文化伝承の性格を明らかにする。②唐代にから現代に至るまで、浙江省各地の茶文化と茶の産業化との関連を探る。③現代の中国において、政府が主導する郷村振興事業化促進政策と非物質文化遺産保護運動の中で、浙江省各地の茶文化はどのような変化と変遷があるのか明らかにする。④浙江省各地の政府が如何に茶文化の歴史資源を利用して地元の影響力を強めるか明らかにする。⑤現代社会で、新しい茶文化を構築するために、政府、茶農、茶商、茶営業者などが何を行ったかを調査し、茶文化ブームが中国で続く理由を検討する。

第 1 章は、以下の内容である。湖州の茶文化伝承は、中国における茶の聖典である『茶経』を

記した陸羽および唐王朝と緊密に繋がる。陸羽の推薦で、湖州の顧渚山における紫笋茶が唐王朝の「貢茶」に入選した。唐王朝政府は、さらに湖州長興で貢茶院を建てた。唐代以降、湖州の茶文化は次第に衰退した。しかし、現代になって改革開放以降湖州の茶文化は復興していった。顧渚山の大唐貢茶院遺跡が、1984年に長興県文化財に指定され、1997年には浙江省文化財に登録された。長興県政府が中心となって 2008 年に大唐貢茶院が再建され、2017 年には大唐貢茶院において「茶聖陸羽清明祭典」が開催された。このように唐代の茶聖陸羽に関連した湖州地域の茶文化を形成し、また唐代の紫笋茶の復活を組み合わせて、観光開発と密接に関連しながら湖州地方における地方文化の展開を進めている。

第 2 章は、以下の内容である。浙江省金華市の磐安県は、宋代から茶生産が盛んで、当時から地方政府が茶貿易の専用施設として玉山古茶場を管理していた。明代になると、玉山古茶場の中にある茶場廟で祀られていた茶神の許遜を祭る祭祀が行われるようになった。清代になっても、玉山古茶場は地方政府によって厳しく管理され、民間での茶貿易は禁止されていた。清末における太平天国の乱によって玉山古茶場は破壊されたが、その後清朝政府によって修繕された。中華民国になると玉山古茶場経営は不振になり、文化大革命期には茶葉廟内の茶神許遜像は破壊された。2002年に地元政府によって茶場廟文化財保護委員会が設立され、茶場廟を修繕し、2005年に玉山茶葉場は浙江省有形文化財に指定され、2006 年には中国有形文化財に登録された。このように、玉山茶葉場が復興されるとともに、茶文化および観光事業の展開が始まった。茶葉廟には茶神許遜夫妻の神像が祀られ、そこを中心に「春社」と「秋社」の年 2 回茶神祭祀が行われる。さらに、その時に地元で生産された茶葉の品評会なども行われ、この「廟会」が 2008 年に中国非物質文化遺産に登録された。玉山古茶場を中心とした歴史の中で、茶生産だけではなく茶神信仰が盛んになっている現状を分析した。

第3章は、以下の内容である。杭州西湖龍井茶は、現在中国茶の中で最も有名であると言える。杭州には、唐代から茶栽培は行われていたが、龍井茶という名称で利用されるようになったのは明代であった。清代の乾隆帝が龍井茶を好んだことから「御茶」として皇族の飲用茶となり、有名になった。民国時代に現代の龍井茶製作が始まり、中華人民共和国の建国後国営龍井茶場が創設されて現代の龍井茶が本格的に製作されるようになった。龍井茶が世界的に有名になったのは、毛沢東や周恩来など国家指導者が杭州西湖の龍井茶を視察し、外国の指導者に「国礼茶」として贈答したことにより中国名茶としての優位性を確立した。改革開放以降も、中国十代名茶の品評会で 1 位に選ばれ、ブランド化を高めた。杭州市政府は、2004 年に杭州市を「茶都」として定め、翌年には国家級茶葉機構が「中国茶都」を杭州とすると決めた。龍井茶は生産地域を拡大し、産業的に推進し、茶貿易を繁栄させると同時に観光産業を盛んにしている。杭州西湖龍井茶は、政治、経済、文化の多様な権力を利用し製造、販売を拡大しただけでなく、地方政府が権力を利用して龍井茶産業を発展させ、龍井茶文化を構築している。

第 4 章は、以下の内容である。嘉興の茶文化は、章氏一族と緊密な関係がある。嘉興市は伝統的な茶産地ではない、いわゆる「非茶産地」に属する。しかし、章氏という地域の名門一族は、清朝初期に紹興から土と茶の苗木を嘉興に運んで章氏古茶園をつくった。清代から 300 年以上も章氏一族によって章氏古茶園は経営されたが、1963 年に古茶園は人民公社のものになった。しかし、その管理がうまくいかず、荒廃状態となった。2008 年に嘉興市書記が茶園の保護を打ち出し、2013 年に章氏古茶園をもとに茶文化を展示する茶文化テーマパークを嘉興市の一地域である塘滙街道に建設した。翌年から、政府が塘滙街道で章氏古茶園文化祭を開催し、嘉興茶史の講演や茶聖の祭祀、茶芸の公演、茶摘みの踊りなどで賑わった。茶生産が盛んな浙江省において、嘉興は

茶生産には不適当な地質を持つ「非茶産地」にありながら、章氏一族によって古茶園が経営されてきた。文化大革命以降衰退した章氏古茶園を、嘉興市政府が中心となって地域文化として復興し、茶文化ネオパークの建設や章氏古茶園文化祭として観光産業化している。

第 5 章は、以下の内容である。浙江省南部の山岳地帯に、少数民族の住む景寧シェ族自治県がある。中国におけるシェ族唯一の自治県であり、南部の福建省からこの地域にシェ族が移動してきたのは 8 世紀といわれている。山岳地域に住むシェ族は、焼畑や山林資源を利用して生活をしてきた。景寧シェ族は、茶栽培も行ってきた。景寧シェ族には、茶に関わる民俗が数多く伝承されている。民謡には、茶摘歌や貴賓が来たとき歌う敬茶歌、茶女歌など数多くある。また、人生儀礼に関わる茶文化として、婚姻儀礼において結婚式で新郎が新婦を迎えに行ったときに新郎側介添と新婦側介添がお茶を飲みながら対歌を歌い合うことや、新婦が新郎の家に着いた時に新郎の両親にお茶と砂糖を捧げる「糖茶」などさまざまな婚姻行事と茶が関連する。また祖先祭祀でも茶 3 杯と酒 3 杯に加えて湯呑にお湯を入れずに茶葉だけを入れる。このように、シェ族では人生儀礼と茶は密接に関連している。シェ族村落の惠明寺村では、仏教寺院である惠明寺で栽培された寺院茶から周囲の集落でも栽培されるようになった茶園茶が発展した。1915 年にパナマ万博で開催された展覧会で、惠明茶が金賞を受賞した記録がある。それをもとに、1979 年に金賞惠明茶と商品名が決められ、周囲の地域ではシェ族だけでなく漢族も惠明茶の生産を協力している。地方政府は、金賞惠明茶のブランド化を行うことによって生産、流通などの経済化を進めるとともに、景寧シェ族にとっての自民族認識と民族帰属意識に結びつくシェ族の茶文化伝承を景寧シェ族自治県博物館でまとめている。

まとめにおいて、第 1 に、浙江省における茶文化伝承の性格をまとめている。それは、茶文化が陸羽や茶神信仰と結びついたり、歴史的な権力者、例えば清代の乾隆皇帝や毛沢東、周恩来などの人物が龍井茶を有名にしたこと、あるいはパナマ万博で金賞を受賞したことなどの伝承がそれぞれの地域の茶文化と結びついている。第 2 に、浙江省における茶のブランド化と茶文化の観光資源化についてまとめている。それぞれの地方政府は、その地域における茶の歴史や有名人と関連させて茶産地活性化として茶のブランド化と茶文化の観光資源化を推進している。しかし、観光産業化はその地域の茶文化を民俗主義化することになり、地元民が本当に考えていることとの乖離が進む危険性もある点を指摘した。第 3 に、浙江省の茶文化伝承にある政治「権力」の影響を分析した。政治権力は、杭州の茶生産や茶文化に大きな影響を与えてきた。歴史的には、顧渚紫笋茶が、唐王朝の貢茶として唐王朝から管理された。磐安の玉山古茶場が宋代に地方政府によって建設され、清代には杭州西湖龍井茶が貢茶になった。政府権力と茶文化は、現代に至っても深い関連を持ち、地方政府は杭州を茶都として地方文化振興を図り、杭州西湖龍井茶を世界文化遺産に登録してさらに観光産業として振興させるなど政治権力は茶文化を利用している。第4に、浙江省の茶文化伝承にあった変化と変遷について言及している。西湖龍井茶の摘採と製茶の技術、あるいは磐安玉山子茶葉などが国家の非物質文化遺産に登録されて保護されているが、茶生産の物質文化に対して地方政府はあまり関心を示さない。あるいは、茶文化に関する祭祀や茶文化祭が行われ、観光と結びついているなど茶文化に関する変化がそれぞれの地方で進展している。第5に、今後の課題として日中茶文化の比較研究について述べている。浙江省の寧波市四明山茶産区、台州市天台山茶産区、杭州市余杭区径山茶産区の 3 か所は日本の茶生産と関連のある地域で、この 3 か所の調査を行って杭州の緑茶と日本の緑茶の比較研究の可能性を指摘した。また、唐代の貢茶は煎じ茶であり、同時代の奈良時代も煎じ茶があった。あるいは仏教と茶文化の関連は、栄西を通じて中国と日本の茶の関係を研究できる点も今後の課題として指摘された。

【論文審査の結果の要旨】

中国茶に関する研究は、中国および日本において数多くある。その研究領域として、中国全体を対象としたもの、雲南や福建など茶栽培が有名な地域の研究、さらに武夷岩茶、福建省福鼎の白毫銀針、祁門紅茶など小地域の研究などがあった。また、研究内容は、茶の歴史、茶生産の技術、中国茶の入れ方、茶産業などを文献中心に研究することが多かった。これに対し、本論文は、これら従来の研究と異なる内容と視点を持っている。中国茶生産の多くは緑茶であり、その生産拠点である浙江省を研究対象としているが、従来は杭州などの有名な緑茶栽培地域の研究が多くあり、浙江省全体を対象とした点は各地の茶文化の多様性を研究できる点で新しい視点の研究を展開したことが評価できる。さらに、研究内容と研究方法は、茶生産の歴史を抑えつつ、その地域の茶文化を民間伝承についての研究は従来少なかった。そして、茶文化の伝承について実地調査を行い、聞き書きによって資料をまとめている点は、従来の文献研究が主であった中国の中国茶研究において新しい研究方法で論文を作成したとしてこの点も評価できる。

以上の点が本論文の特徴であるが、具体的には第１章湖州長興県では陸羽墓と大唐貢茶院を対象に歴史文化を論じた。第２章は、磐安県で宋代に設立された玉山古茶場を対象に、その歴史背景を整理した上でそこで行われる茶神許遜の祭祀や春秋の祭礼など茶文化と関わる民間信仰を論じた。第３章では浙江西湖龍井茶が国家権力と結びついて龍井茶産業の発展や茶文化の構築について述べた。第４章では、嘉興の章氏によって経営されてきた古茶園について一族経営から地方政府による茶文化復興と地方進展が述べられた。第５章では、景寧シェ族の茶栽培と茶文化について惠明茶のブランド化と民族意識について論じられた。このように、歴史文化、民間信仰、国家権力、一族経営、少数民族と関連させて、茶文化についてそれぞれの地域における文化的特徴をフィールドワークで獲得した資料を利用して論じている点は、従来の中国茶研究における研究内容および研究方法とは異なる独自の特徴として評価できる。

ただし、課題も存在する。実地調査を実施して民俗学的な視点からの研究を行った点は評価できるが、例えばシェ族の茶俗については従来の調査研究もあるのでさらなる調査研究の深さが必要であった。また、杭州西湖龍井茶については、従来の製茶方法や手遣いについてさらなる古老への体験談や地域伝承を調査すべきであった。

中国の国家体制と地域産業との関連を一つの視点にしたことは評価できる。例えば、習近平が玉山復興に大きな役割を果たしたので茶神許遜の恩恵で国家主席になることができたという伝承は、現代中国の政治活動と茶伝承と結びつけて興味深い。しかし、研究としては「政府」「権力」「地方政府」などの用語が具体的に何を指すのかという明確な定義が行われていないので、分析が不十分になっている。

また、本論における、地域の茶神信仰の復興や観光隆興などが民俗としての茶神信仰と関わる点を指摘している点は優れているが、その点をさらに深く分析する必要があると思われる。

さらに、茶を観光資源として活用する方策は、新中国成立以来の毛沢東の農業政策と不可分に結びついている。当時輸出茶の余剰をさばくための国内消費拡大政策があり、新型茶芸館を普及させ、外国要人に貴重茶を贈るというような茶の政治的利用という面について、さらに茶が政治的にどのように利用されているかという点を分析すると現代中国における茶のあり様がさらに明

らかになると思われる。そして、日本における中国茶および中国茶芸の普及が中国の国家政策とどのように結びついているかも、中国茶の日中共同研究の視点で今後検討できると思われる。

仏教と茶については、日本においても兵庫県の茶の自生地における弘法大師伝説との関わりなどがあり、茶神や茶伝説とからめて仏教と茶文化の関連については中国においてさらに研究が展開できるだろうし、日中における茶文化の比較研究に展開できる。

以上のように、分析の点で物足りない部分もあるが、第１章湖州長興県では陸羽墓と大唐貢茶院を対象に歴史文化を論じた。第２章は、磐安県で宋代に設立された玉山古茶場を対象に、その歴史背景を整理した上でそこで行われる茶神許遜の祭祀や春秋の祭礼など茶文化と関わる民間信仰を論じた。第３章では浙江西湖龍井茶が国家権力と結びついて龍井茶産業の発展や茶文化の構築について述べた。第４章では、嘉興の章氏によって経営されてきた古茶園について一族経営から地方政府による茶文化復興と地方進展が述べられた。第５章では、景寧シェ族の茶栽培と茶文化について惠明茶のブランド化と民族意識について論じられた。このように、歴史文化、民間信仰、国家権力、一族経営、少数民族と関連させて、茶文化についてそれぞれの地域における文化的特徴をフィールドワークで獲得した資料を利用して論じている点は、従来の中国茶研究における研究内容および研究方法とは異なる独自の特徴として評価できる。上記の諸点を今後の課題として受け止め、今後日本人研究者との共同現地調査を推進することができれば、より総合的な茶文化の研究を展開させることが可能になると思料する。

したがって、本論文の審査結果に基づき、潘城氏に博士（歴史民俗資料学）の学位を授与することが妥当であると認める。